

先日新聞のコラムで「素晴らしい人間に出会うのではなく人間の素晴らしさに出会う」という言葉を読みました。本当に・・・今回の東日本震災で胸をつかれるどれほどの悲しさと同時にどれほどの人間の素晴らしさに出会ったことか、と改めて人間の心のしなやかな強さと優しさを思いました。高台で一人暮らし、交通手段をなくし食事の道が絶たれたお年寄りの方のところにおにぎりや飲み物を届ける祖父の手伝いを小学生の姉妹がしていました。毎日背負子に20軒分のおにぎり、飲み物を入れて細い坂道を登り一軒一軒配って歩く姉妹の額には寒い中で汗がありました。大変でしょう？と聞くインタビューーに「おばあちゃんやおじいちゃんが喜んでくれるから」とさわやかな顔で答える笑顔に胸が熱くなりました。

妻、子どもたち、母親、5人家族の4人を亡くし独りぼっちになった40代の方が、それでも生きていかななくては、としっかり前を向いた写真。やはり一人になった若い父親が「自分もがんばっている。みんながんばろう」とボードに記した文字。思わず私だったら、と言葉を失いました。まだ家族の遺体の見つからないなか、ボランティア活動をする人たち。ボランティア活動をする高校生や大学生の引き締まった顔、自衛官の責任感に満ちた顔。悲しみと不安のなかでも見せてくれる子どもたちの笑顔。この1ヶ月、切なさと同時に人間の心の可能性の素晴らしさも毎日感じてきました。

建物が消え瓦礫となった街の写真を見ながら私の頭の中で66年前の原爆で焼け野原となった広島がだぶりました。昭和21年（1946年）春、私は7歳で台北から父島の郷里広島に引き揚げてきました。日本に着き桜の花が見えたとき甲板に集まった人々が「桜だ、桜だ」と口々に叫びました。港から列車に乗り広島の駅に降り立ち一面の焼け野原を前にしたとき、父が「似の島が見える」と一言感に堪えた声を出した後、微動だにせず沈黙していた姿を今もはっきり憶えています。今の広島から想像もできませんが、はっきり瀬戸内海の島が見えたのです。66年前のあの広島は、平和都市として見事によみがえりました。

震災で亡くなられた人の49日も終わり、更に個々の状況が明らかになってきています。まだ孫を見つけれない、息子や嫁が、父が、母が、祖父が祖母が、まだ行方不明だとまだまだ多くの方が話しています。もと家があったところに、と花を手向け涙ぐむ方の映像が臉に焼き付いています。きっと岩手県も宮城県も福島県もよみがえる、そう信じています。かつての広島がよみがえったように、必ず人は立ち上がる、人間の素晴らしさが発揮される、と何もできない私は、呪文のように今心の中で言い続けています。

平成23年5月の初めに